

基地のない平和な町を

石垣市立石垣第二中学校 三年 大城 花菜

「ゴォー、ドドドーン。」

「大変だ、大事故だ。」

「夏休みでよかった、大惨事をまぬがれたね。これが平日だと思つてゾツとする。」

みんなは口々につぶやいた。平成十六年八月十三日、沖縄国際大学に、在日米軍のヘリコプターが墜落したのだ。

私の父は沖縄国際大学の出身だ。父は、このニュースを聞いた時、

「この事故は、起こるべくして起こったんだよ。いつかは、こんな日がおとずれると思っていた。」

とつぶやいた。町のど真ん中に基地があるのだから、あたり前の推測だったにちがいない。県民はこの事故を想定していたかもしれないと確信した。

この事故のことを調べると、事故直後、消火作業がおわった後にアメリカ軍が現場を封鎖し、事故をおこした機体を搬出するまで、日本の警察、消防、行政、大学関係者が、現場に一切立ち入れなかったという記事があった。

私は、まだ『沖縄戦は終わっていない』と感じた。戦後七十一年、戦争は、遠い遠い過去のことと捉えていた私はがくぜんとした。

私の父は、嘉手納町出身だ。幼い頃から、アメリカ軍の嘉手納基地とは、隣合わせに生きてきた。おじいちゃんの家に行くと、防音工事といって、厚いガラスが入っている。早朝から夜遅くまで、騒音がすごいらしい。私も、夕方ベランダにでてみると、ひっきりなしに戦闘機の音がきこえた。私は、嘉手納では、もう何十年もアメリカ軍の基地があるために、騒音の被害にあっていることに、悲痛な思いがした。

今では、基地の町となり果てたが、戦前は、軽便鉄道が通るステキな町だったそうだ。ひいおばあちゃんが、

「戦争が全てをうばってしまったさあー。」

「きれいな町も。」

「愛しい人も。」

「家族も。」

私はハツとしました。いつも語らない、はじめてきく話だったからだ。私にとって、遠い遠い昔のことでも、戦争を経験した人にとっては、忘れようとしても忘れられない、思い出したくもない、語りたくないそんな話なのかもしれない。

私のひいおじいちゃんは十九歳という若さで戦死した。ひいおばあちゃんも十九歳という若さで息子を産み育てあげた。我が子の姿も見ず戦死したひいおじいちゃんは、一体どんな気持ちだっただろう。悔しくて、はら立たしくて、いかりがこみあげるような、炎のような気持ちだったにちがいない。

「必ず生きて戻ってくるよ。」

と約束し、何年も、その約束を信じているひいおばあちゃん。

「明日は、きつと帰ってくる。」

毎日そういう思いで床についていたそうだ。それが、明日、明後日になり、一週間になり、一ヶ月になり、一年になり、そして七十一年たったそうだ。

ひいおばあちゃんも、今年で九十歳。

「もうあれから、年がすぎたんだね。」

と、しみじみつぶやきます。私も心の中で、「苦しさにたえ、恐ろしさに打ち克ち、生きぬいてきた、そうぜつな七十一年。ひいおばあちゃんは、本当に頑張ってきたんだな。えらいな。」と拍手を送った。

日頃、はなれてくらしているから、あまり話ができないけど、戦争の話がきけて、本当によかった。

軽便鉄道の終点だった嘉手納は、緑にあふれ、美しい町だったにちがいません。私は、これから、未来へ向かって、そんなひいおばあちゃんが夢見る、昔の嘉手納に、少しでも近づけるような、町づくりに貢献していきたいと思う。そのために、平和な世の中であり、平和な沖縄であることが絶対条件だ。

未来へ向かって、基地のない沖縄、花と緑に囲まれた平和な沖縄を築いていきたい。

未来を担う若者の一人として、私も沖縄から平和へのメッセージを発信させていきたい。

There is no path to peace,peace is the path.

(平和への道はない、平和こそが道なのだ。)